

平成22年 6月16日現在

研究種目： 基盤研究（C）
 研究期間： 2007 ～ 2009
 課題番号： 19520140
 研究課題名（和文）
 女性表現と国民国家—文学的感傷の機制を視座に
 研究課題名（英文） Women' s writing and the nation state
 —from the view point of the literary sentimentalism formula
 研究代表者
 菅 聡子 （KAN SATOKO）
 お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授
 研究者番号： 70224871

研究成果の概要（和文）：明治期から戦時下にわたり、女性作家の国民化の様相を抽出し、国家との共闘／対抗のさまを明らかにした。具体的には、樋口一葉の和歌・日記、柳原白蓮の昭和における表現活動、吉屋信子のベストセラー小説をとりあげ、女性表現と国民国家の関係について論じた。

研究成果の概要（英文）：This study analyzes the nationalization of women in modern Japan and explains the cooperation/resistance between the nation state and women' s writing from the Meiji era to the wartime in Showa. Specifically, picking up Higuchi Ichiyo' s waka and diaries, Yanahara Byakuren' s writings in Showa and Yoshiya Nobuko' s best seller novel, this study discusses the relationship between these writings and the nationalization of women.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：女性作家、ジェンダー、国民国家、メディア、女子教育

1. 研究開始当初の背景

女性作家の国民化の問題をめぐっては、従来、とくに太平洋戦下における個別の作家研究を中心に考察されてきた。対して、申請者は、近代日本の国民国家形成のプロセスにお

いて、その根幹をなす明治二十年代に着目し、樋口一葉を中心とする、当該時期の女性表現ならびにその表象をめぐって、考察を重ねてきた。この考察の過程で浮上してきたのが、ひとつは女性の国民化と「和歌」の連関の起

点に存在する皇后の問題であった。さらに、伝統的和歌が持つ「自動性」がどのように国家と連結し、歌の主体とは別個のレベルで国家との共謀が形成されるのかを、「題詠歌」の分析から考察することが可能であると思に至った。加えて、申請者がこれまでの研究過程のなかで着目したのは、国民化のプロセスにおける「感傷」の共有という機制である。過去の実例に明らかなように、太平洋戦時下、人々を翼賛体制に駆り立てた大きな原動力は、机上の理論ではなく、感傷に満ちたさまざまな表象であったはずだ。このような感傷の共同体がどのような機制として働くのか、そもそも、そのような共同体は、文学テキストにおいてはどのような形で形成されることになるのか、この二点に対する問題意識を背景とし、本研究は企図された。

2. 研究の目的

以上の研究の背景にてらし、本研究の目的は、次の二点、すなわち ①明治期の女性の国民化における和歌の機能について考察すること ②女性表現における国家（政治）との共闘／対抗のさまを、とくに広範な一般読者を獲得したいわゆる大衆小説と呼ばれるテキストの分析を通して明らかにすることを通して、日本近代における女性作家（女性表現者）の国民化の問題を考察することである。

3. 研究の方法

上記目的を考察するための前提として、東京女子高等師範学校の学生たちが、どのように昭憲皇太后の歌を通して「国民化」されたか、明治以降の雑誌記事や同窓生誌等の文章を分析し、歴史的な文脈と照らし合わせながら考察した。

上記目的①については、昭憲皇太后・樋口一葉・柳原白蓮の歌を直接の分析の対象とし、各歌集ならびに白蓮の場合は日中戦争時に編集した『支那事変歌集』ならびに国策小説をあわせ分析した。具体的には、『昭憲皇太后御集』『昭憲皇太后御集謹解』『樋口一葉全集』所収の歌、白蓮については個人歌集のほか歌誌「ことたま」所収の歌ならびに随筆、国策小説『民族のともしび』『支那事変歌集』所収の戦時詠等である。

昭憲皇太后の歌については、掲載された雑誌の文脈を視野に入れ、メディアの中での機能をも加味した。樋口一葉については、日記にあらわれる歌の機能をその配置・主体形成のプロセスの上で持ちうる意味等について、

彼女の歌が公的場において発せられる場合と、私的場において発せられる場合とを比較検討した。白蓮においては、とくに、戦時下での発言と、戦後の平和運動での発言を比較分析した。

②については、吉屋信子『女の教室』を対象に、女性たちの皇民化教育のプロセスを読み解き、加えて『小島の春』との連関分析を通じ、とくにそれが皇后の和歌とともにあらわれていることに着目し、①の関心である皇后の歌の機能の観点からハンセン病施設への献身が持ちうる意味をとらえ直した。それらをふまえ、さらに本テキストと国家との共謀の様相を分析した。加えて、テキストにおける「中国」の表象を、大東亜共栄圏構想の文脈において分析した。その際、テキスト内の「朝鮮」表象との対比から分析を行い、日中戦争時下にこのテキストが発信したメッセージを考察した。

4. 研究成果

上記の具体的テキスト分析を通して、とくに白蓮・吉屋の表現において形成される感傷の共同体が、国家との共謀を成立させていることを明らかにした。一方、一葉の歌ならびに日記に見られるように、歌の伝統が導く自動性が国家との連続をもたらしつつも、書く行為の主体が、その主体形成のプロセスにおいて、その自動性からの自律を志向し、国家の要請から逸脱していくことを明確にしえた。

(1) 研究目的①②を考察する前提として、東京女子高等師範学校における学生たちに施された国民化教育の様相を、各種同校資料・明治期の教育雑誌記事・皇后来校記事等の分析を通して明らかにした。いずれも、皇后の歌・業績等が学ぶべき理想の女性像として学生たちの前に提示され、彼等においては、皇后の姿をロールモデルとして、国家に献身することが内面化されていたことを論じた。しかしながら、同時に、同校が、教育目的としては良妻賢母主義を掲げながら、実際には多くのそれから逸脱した自主・自立の女性たちを排出したという事実から、女性にとっての教育が持つ真の意義がそこにあると結論した。従来の女子教育あるいは女学生研究においては、国立校における様相の考察がまったく欠落していた。その意味で、東京女子高等師範学校を考察の対象としたのは、本研究が初めてである。

(2) このような女子教育における皇后の表象が備えていた教育的機能を考察の前提に、女性たちに向けられる教訓その他において、

皇后の歌がどのように利用され、また効力を発揮したかを、②における吉屋信子『女の教室』の分析において導入した。とくに、日中戦争時の婦人雑誌の記事を分析することで、日中戦争時に昭憲皇太后の日清戦争歌が引用されることで、今の戦いの正当性が保証され、さらに過去の栄光、国民国家建設の志を喚起する文脈が形成されることを明らかにした。加えて、本テキストにおいては、主要登場人物の一人がハンセン病患者施設への献身に身を投じるが、そのエピソードの背景に、『小島の春』の影響があること、その結果、大正天皇皇后の歌が引用され、その歌のもと、女性の皇民化教育の文脈が可視化されることを論じた。本テキストについては、多くの問題を含むにもかかわらず、これまで研究論文はまったくなかった。本研究がはじめての本格的論文であり、吉屋信子の女性読者との親密な関係が、読者を国家との共謀へ導くものであり、またそこに吉屋のフェミニズム思想の陥穽があったことを明確に論じたという点においても意義がある。

(3) 柳原白蓮については、従来、その恋愛事件まで、すなわち大正期までの活動以外、ほとんど認識されてこなかった。しかし、女性表現者としての白蓮を考える際には、むしろ、恋愛事件後、昭和における活動こそが問題とされるべきである。この新しい問題意識にたつて、本研究では、宮崎龍介との結婚後、彼女が行った社会主義思想にのっとりた社会活動と発言、戦時下における戦争協力、愛児の戦死を経て、戦後、平和運動に献身するまでの過程を、発表した歌・文章・小説等を具体的に分析しながら追跡した。ことに、これまで年譜からも抹消されていた国策小説『民族のともしび』について、とくに作中にあらわれる中国表象を抽出しつつ分析した。その結果、そもそも宮崎滔天を舅に持つ白蓮が、大東亜共栄圏思想の幻惑により、結果として大日本帝国の欲望の共謀者となってしまったことが明らかになった。その反転として彼女の戦後の平和運動があるが、戦前・戦中・戦後を通じて、「母」をめぐる観念においては実は変容がないことが明らかになり、母性主義の持つ問題の一つを可視化することができた。白蓮の戦後の平和運動は、ほとんど言及されたことがなかったが、個人の活動としては瞠目すべきものであり、今回、その再評価を行い得た。

(4) 樋口一葉については、本研究の前段階から、その日記・歌についての考察を蓄積してきた。今回、その集大成として、日記にあらわれる自称、すなわち「我」を直接の手がかりとしながら、その表現行為がどのように自己を主体として立ち上げていくのか、その

様態を具体的に追跡した。

一葉日記には、節目節目に自己語り、すなわち自伝的叙述があらわれることに着目し、そのような過去への確認が遡及的にあるべき自己像、ならびに現在の自己のあり方を裏付ける記憶の形成として機能していることを明らかにした。そのうえで、日記において種々試みられる文章形式が、古典文学の歌日記の伝統を引き継ぎながら、すべての叙述が歌に収斂していくスタイルに、近代的思考・意識の流れと文章のプロセスとの一致が見られ、新しい文章形式の模索であったのではないかと、という新しい観点を導くことができた。

(1)～(4)を通じて明らかになったことは、皇后の歌が現在における教育的効果のみならず、過去を現在の保証として意味づける機能を有し、国家の現在の欲望の根拠を歴史的保証するものとなりうることである。よって、皇后の歌については、その具体的内容のみならず、むしろ、その歌が配置される文脈・メディアの方が重要である。この点については、今後も研究を継続していきたい。

さらに、とくに吉屋信子の事例に明らかのように、女性作家と女性読者の形成する共同体が、戦時下においては大東亜共栄圏思想へと容易に接続するものであること、そして女性同士の関係性、絆を志せば志すほど、その陥穽にはまりこんでしまうという状況が生じていることが明らかになった。よって、女性読者のあり方について、社会動向の形成にいかに関与するのか、といった観点からの研究が必要であることがわかった。この点については、今年度から具体的に研究を開始する。

なお、本研究の成果としてかかげた下記①②④⑤はいずれも新見であり、これまでの研究においては全く論じられていなかった問題点を考察したものである。これらを通じて、従来の女性表現研究に新たな視角を開くことができたと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

① 菅 聡子 国家と女学生—東京女子高等師範学校を事例として—、お茶の水女子大学人文科学研究、査読有、第4巻、2008年、pp41-51

② 菅 聡子 〈よろめき〉と女性読者、文学、査読無、第9巻第2号、2008年、pp54-68

③ 菅 聡子 女性作家・樋口一葉と〈われ〉

の生成—詠歌行為の視座から—、文学、査読無、第9巻第4号、2008年、pp61-73)

④菅 聡子 柳原白蓮の〈昭和〉、お茶の水女子大学 人文科学研究、査読有、第5巻、2009年、pp1-12

⑤菅 聡子 〈女の友情〉のゆくえ—吉屋信子『女の友情』における皇民化教育—、お茶の水女子大学 人文科学研究、査読有、第6巻、2010、pp. 1—13

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菅 聡子 (KAN SATOKO)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：70224871